

## 国語

(60分)

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、  
左記の注意事項をよく読むこと。

## 注意事項

- 1、問題冊子は、18ページまであります。
- 2、解答用紙は問題冊子の中央にはさんでいます。解答はすべて、解答用紙に書き込みなさい。
- 3、始め、の合図でページ数を確認し、受験番号・名前を書きなさい。
- 4、問題の内容についての質問には、いっさい応じません。印刷のはっきりしないところがあれば、静かに手をあげなさい。
- 5、時間を知りたいときも、静かに手をあげなさい。
- 6、具合が悪くなったり、トイレに行きたいときは、手をあげて監督の先生の指示に従って行動しなさい。
- 7、問題冊子は、各自持ち帰ってよろしい。



問題は次のページから始まります

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、字数制限のある問いは句読点や「」なども一字にふくみます。)

僕は自分でいうのもなんだけど、子供の頃から比較的「勉強が得意」だった。しかし、勉強が得意だったという自覚が芽生えたのは、勉強したことに對する成果としてのテストや成績がそれなりに良かったから、そう思えただけなのである。

しかし、大学生になって、建築家になりたいと思うようになると、受験勉強に代表されるような「模範解答」が、建築を勉強する上で存在しないことを知る。つまり、建築を設計することに対しては、絶対的な「正解」がなく、「答え合わせ」をすることさえできない。自分のやったことに對する評価が常に相対的なものであることに戸惑いを覚えた。どうすればいいか、分からなくなった。

そして、本当の意味での勉強は、実のところ、与えられた問いに対して合理的に最短距離で正解を導き出すことではなく、自分なりに現状を把握して、問いそのものを自分で発見し、最良の解答をそのつど提出するというところにあると気づきはじめていたのである。

つまり、今まで僕は勉強が得意だったのではなく、そもそも本質的には勉強をしていなかったのかもしれない。知識を詰め込むことで、賢くなった気になっていただけなのだ。与えられた問いに答えることは、教科書から取得した情報があればできることである。瞬発力とともに、記憶力がものをいう。僕は勉強が得意ではなく、器用で、要領が良かっただけだ。けれども、本当の勉強は、あらかじめどのようなか分からない問いからスタートする。そんなことを教えてくれたのは、旅だった。

建築について、空間について、建築家として働くための武器を磨く時間は、大学の教室ではなく、旅することによる、未知なるものとの遭遇によって学びが発動する時間だった。そこで、世界の大きさを知り、昨日の自分とは違う「新しい自分」と出会うことができた。そのつど、目の前の風景が少しかだけ変わって見えるようになっていくことに喜びを覚えた。

具体的には、僕は旅を通して魅力的な建築をスケッチすることで、人間と建築の関係性に対する自分なりの解釈をインプットしていった。目の前の建築が存在する意図を考えるトレーニングである。設計者の意図を想像することで、自分が建築を設計するという創造へとつながることを知った時、僕は建築が心の底から好きになっていた。なぜなら、自分が論理的に構築した根拠をもって設計した空間が、その建築の利用者にとって、魅力ある豊かさへと伝達可能であることを世界の名建築たちが教えてくれたから。

④ 建築家という仕事は、デザイン（設計）を通して、ある敷地に建築を建てることである。ちよつと先の未来を想像し、実際に建築をつくるという意味では、とてもクリエイティブ（創造的）な仕事である。要するに、建築家は予測不能なものに（注1）対峙しながら働いている。敷地も、クライアントも、（注2）与条件は、いつだって違う。すべてが X なのだ。

⑤ そこで、その時代、その場所、その人のために最良の建築をデザインするためには、自分なりに高い意識をもって、的確な問いを設定し、豊かな空間という特殊解をそのつど提示し、実現しなければならぬ。そのためにも、未知なるものとの遭遇に立ち向かう柔軟な価値観と、多様な抽斗を兼ね備える必要がある。

大切になってくるのは、まずは「見る力」である。与えられた環境から最重要な「問いを立てる力」と言い換えても良い。ひとつとして同じ条件がない設計依頼に対して、目標地点を明確にして、根拠をもってデザインを構築することで、チームの共感を得る。チームとは、依頼主（クライアント）と作り手（職人たち）のことだ。建築家の独りよがり、決して強度ある建築にはならない。それだけ建築というフィールドは複雑なもの集合体であり、それを成し遂げるのは、「集団的創造作業」であるからだ。

僕は、思想家の内田樹先生の自宅兼道場である《凱風館》を神戸に設計して、建築家としてのデビューを果たした。ものすごく幸運だった。それは、自分が読者として先生の著作のファンだったことから始まって、まさかの設計依頼を受け、（注3）処女作の完成と共に、僕も先生を師として、（注4）合気道を学ぶようになったからだ。自分でも、まったく予想

外のことである。

それまで、スポーツを通じて強弱勝敗を競いながら向上することに努力してきた者として、試合のない、他人と比較できない武道の道を歩むことは、最初は不思議だった。自分の身体感覚を日々鍛錬することには、近道などない。日々のお稽古を通して自らの身体を（注5）モニタリングすることで、小さな発見を地道に積み重ねていくしかない。

つい先日、二歳になったばかりの娘に『わらしべ長者』を読んでいて、ハツとさせられた。主人公の貧乏な男は、藁しべを手にして、それをあれよあれよと蜜柑や馬と交換し、最終的に屋敷を手に入れてしまうというおとぎ話である。こういうことが、人生には本当に起こるのだ。これを可能にしたのは、男自身の打算的な狭い想像力ではなく、「初めに触ったものを、大事に持って旅に出ろ」というお告げを「信じる力」である。この時に、未知なるものへと飛び出す「小さな勇氣」の大切さを教えられたのだ。

建築家として僕が大事にしているのは、自らが思考し、目の前の風景との対話を続けることである。自分の心の声に耳をすませ、信念をもって、仕事をすること。建築家として、いかにそうした雑多なものを受け入れられるかを日々考えている。何かを排除した上に成り立つ脆弱な統一感ではなく、多様なものを受け入れる豊かさへの挑戦と言えるだろう。だから、僕にとっての勉強は、本質的には終わりが無い。いつだって、新しい自分に出会えることを信じている。空間との対話を通して、こうして言葉を綴ることも、あるいはまた非言語的な見えないものへの想像力を発動させながら予測不能な先の未来を想像することも、すべて建築の新しい可能性を開くための創造なのだ。建築という教科書に自分なりの新しいページが追記できることを信じて。

（光嶋裕介「未知なるものとの遭遇」による）

(注)

- \* 1 対峙……向きあって立つこと。
- \* 2 与条件……与えられた条件のこと。
- \* 3 処女作……最初の作品。
- \* 4 合気道……日本の武道の一つ。
- \* 5 モニタリング……観測・調査・分析すること。監視すること。

問1 傍線部①「受験勉強」とありますが、それはどのようなものだと筆者は考えていますか。解答らんに合うように、三十文字以内で本文から抜き出して答えなさい。

問2 傍線部②「相対的なものである」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分に対する評価は、何かをするたびに移り変わり一つに定まることがないという意味。

イ 自分に対する評価は、人によって考え方が違うために決まった基準がないという意味。

ウ 自分のやったことは、他の場合と比較してよりよいものかどうかで判断されるという意味。

エ 自分のやったことは、相手の立場になって考えているかどうかで評価されるという意味。

オ 自分のやったことは、現在と将来とで評価が大きく変わる可能性を持っているという意味。

問3 傍線部③「目の前の風景が少しだけ変わって見えるようになっていく」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 建築や空間について大学で学び、それを旅する中で実際に確かめることになったから。
- イ 未知なるものとの出会いを通して、新しいものの見方を手に入れることができたから。
- ウ 知らないことを学ぶ中で世界の大きさを感じ、目の前の風景にも圧倒あつとされてしまうから。
- エ 昨日の自分とは違う「新しい自分」になるために、世界を観察する眼めを鍛きたえていたから。
- オ ちよつとした風景を見る時にも、建築と結び付けて考えることに喜びを覚えていたから。

問4 傍線部④「建築家という仕事」とありますが、それはどのようなものですか。その説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 創造的なもの。
- イ 予測不能なものに対峙たいじするもの。
- ウ 柔軟な価値観や多様な抽斗ひきだしが求められるもの。
- エ 「見る力」と「問いを立てる力」の両方が必要なもの。
- オ 「集団的創造作業」であるもの。

問5 空らん X にあてはまることばとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一喜一憂いっきいちゆう
- イ 一朝一夕いっしょういっせき
- ウ 一進一退いっしんいつたい
- エ 一長一短いっちやういつたん
- オ 一期一会いちごいちえ



問6 傍線部⑤「的確な問いを設定し、豊かな空間という特殊解をそのつど提示し」とありますが、これは勉強のどのような特徴と一致しますか。本文から三十字以内でさがし、最初と最後の四字ずつを抜き出して答えなさい。

問7 傍線部⑥「ハッとさせられた」とありますが、その理由を三十字以内で説明しなさい。

問8 傍線部⑦「打算的な狭い想像力」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア もつたいぶって期待をもたせようと考えること。
- イ こうすればきつと得をするだろうと考えること。
- ウ 利にこだわりいくらでもほしいと思うこと。
- エ けちくさく物を手放したくないと考えること。
- オ これ見よがしに見せびらかしたいと思うこと。

問9 傍線部⑧「建築の新しい可能性を開くため」とありますが、そのために筆者はどのようなことを大事にしていますか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア さまざまな風景と出会い思考することで、自分を新しくし続け多様であろうとすること。
- イ 自分の心の声に耳をすまし正直になることで、自分なりの新しい建築観を形成すること。
- ウ 信念をもって仕事をすることで、非言語的な見えないものへの想像力を失わないこと。
- エ 建築家として雑多なものを受け入れることで、予測不能な先の未来を想像すること。
- オ 豊かさを求めて勉強し続けることで、新しい自分との出会いについての文章を書くこと。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、字数制限のある問いは句読点や「」なども一字にふくみます。)

野球教室の日は晴れた。「日ごろの行いが良かったから」と校長先生は典型的な言い回しを口にし、「どうして大人はよくそう言いたがるのかな」と疑問に感じたが、とにかく前日は打って変わり、快晴だった。

午前中の二時間、希望する子供はバットを持ち、校庭に出て、選手の指示通りに素振りの練習をした。

担任教師たちのいく人かは A に覚えがあるのか、子供たちにもじりバットを振った。久留米もその一人で、いつも真面目な顔でチョークを使っているだけであるし、体育の授業でも笛を吹く程度であったから、運動が得意な印象はなかったのだが、学生時代は野球部で鳴らしていたというのも嘘ではなかったらしく、美しい姿勢で素振りを披露した。

「久留米先生、恰好いい」と女子から声上がり、僕と安斎は顔を見合わせ、なぜか面白くない気持ちになった。

安斎も、僕と似たり寄ったりの、情けないスウィングをしていたが、途中で、「加賀、校庭でみんなでバットを振っているのは何だか変だよな」と言った。

「新しい体操みたいだ」

「みんなで振り回して、電気でも起こしている感じにも見える」

(注1) 打点王氏は真面目な人だったのだろう、形式的にふらふらと歩き回り指導のふりをするのではなく、一人一人のフォームを見ては、肘や膝を触り、丁寧にアドバイスをした。

僕たちのいるあたりには、一時間もしてからやつと来た。

打点王氏は、僕と安斎に気づくと顔を少しひくつかせた。前日、(注2) タクシーに乗り込んできた二人だと分かったのだ。「昨日はどうも」と挨拶する様子で、笑みも浮かべた。「どれ、振ってごらん」と声をかけてくる。

僕は、うん、とうなずき、バットを構えたが、「うん、じゃなくて、はい、だろ」と横から指摘された。見れば久留米が

立っていた。スポーツウエア姿も様になり、打点王氏の隣となりに立つと、コーチのように見える。

「はい」僕は慌あわてて、言い直す。ろくな素振りはできなかったが、打点王氏は笑うこともなく、「もう少し、顎あごを引いてごらん」とアドバイスをしてくれた。「身体の真ん中に芯しんがあるのを意識して」

はい、と答えてバットを振ると、僕自身は変化が分からぬものの、「うん、そうそう」と褒ほめられる。安斎も、僕と似たような扱あつかいを受けた。

そして、だ。安斎がいよいよ本来の目的に向かい、一步踏ふみみ出す。「久留米先生、草壁くさかきのフォーム、どうですか」と投げかけたのだ。

久留米は不意に言われたため、小さく驚おどろき、同時に、草壁がどうかしたのか、と醒さめた表情も浮かべた。草壁がいること自体、忘れていた気配すらあった。

草壁は、僕たちのいる場所から少し離はなれたところにいたが、打点王氏が近づいていくと緊張きんちやうのせいなのか、顔を真っ赤にした。

「やってごらん」打点王氏が声をかける。

草壁はうなずいた。

「うなずくだけじゃなくて、返事をきちんとしなさい」久留米がすかさず注意した。

草壁はびくつと背筋を伸ばし、「はい」と声を震ふるわせた。

<sup>a</sup> あたふたしながら、バットを一振りする。僕から見ても不恰好ふかつこうで、バランスが悪かった。腕うでだけで振っているため、どこか弱々しかった。

安斎はさすがのような目で、打点王氏を見上げた。「草壁はどうですか？」と、草壁の名前をはっきりと発音し、昨日の依頼らいを想起させるように言った。

打点王氏は眉を少し下げ、口元をゆがめた。このスウィングを褒めるのは至難のわざ、と思ったのかもしれない。

「よし、じゃあ草壁、もう一回、やってみなさい」久留米が言ったが、そこで安斎が、「先生、黙ってて」と言い放った。

久留米は、自分に反発するような声を投げかけた安斎に、目をやった。①自分に向けられた槍の切っ先の形を、じつと確認するかのようではあった。むっとしているかどうか分からない。

「先生がそういうことを言うと、草壁は緊張しちゃうから」安斎の目には力がこもり、声も裏返っていた。

「こんなことで緊張して、どうするんだ。緊張も何も」

「先生」あの時の安斎はよくも臆せず、喋り続けられたものだ。つくづく感心する。「草壁が何をやっても駄目みたいな言い方はやめてください」

「安斎、何を言ってるんだ」

「子供たち全員に期待してください、とは思わないですけど、駄目だと決めつけられるのはきついです」

安斎は、ここが勝負の場だと覚悟を決めていたのかもしれない。立ち向かうと肚を決めたのが分かり、僕は気が気ではなかった。

打点王氏のほうはいえば、大らかなのか鈍感なのか、安斎と久留米との間で起きる火花を気に掛けることもなく、草壁のそばに歩み寄ると、「もう一回振ってみようか」と言った。

②はい、と草壁は顎を引くと、すっと構えた。先ほどよりは強張りがなく、脚の開き方も良かった。先入観を、と僕は(注3)念じていた。そのバットで吹き飛ばしてほしい、と。

もちろん草壁が、プロ顔負けの美しいスウィングを披露し、その場にいる誰もが呆気に取られ、いちやく学校の人気者になる、といった劇的な出来事が起こると期待していたわけではなかった。むろん、そのようなことは起きなかった。草壁の一振りは、先ほどの腰砕けのものに比べればはるかに良くなっていたが、**B**をみはるほどではなかった。

安斎を見ると、彼はまた、打点王氏を見上げていた。

腕を組んでいた打点王氏は、草壁を見つめ、「もう一回やってみよう」と言う。

こくりとうなずいた草壁がまた、バットを回転させる。弱③いながらに風の音がした。

「君は、野球が好きなの？」打点王氏が訊ねると、草壁はまた首だけで答えかけたが、すぐに、「はい」と言葉を足した。「よく練習するのかな」

「テレビの試合を観て、部屋の中だけど、時々」とぼそぼそと言った。「ちゃんとは、やったことありません」

「そうか」打点王氏はそこで、少し考える間を空けた。体を捻り、安斎と僕に一瞥をくれ、久留米とも視線を合わせた。その後で、草壁の肘や肩の位置を修正した。

草壁が素振りをする。

ずいぶん良くなったのは、僕にも分かる。同時に、打点王氏が、「いいぞー」と大きな、透明の風船でも破裂させるような、威勢の良い声を出した。まわりの子供たちからの注目が集まる。「中学に入ったら、野球部に入ったらいいよ」打点王氏は言い、そして、僕たちが望んでいたあの言葉を口にした。「君には才能があるよ」と。

自分の周囲の景色が急に明るくなった。安斎もそうだったに違いない。白く輝き、肚の中から光が放射される。報われた、という思いだったのか、達成した、という思いだったのか、血液が指の先にまで辿り着く、充足感があった。

草壁は目を丸くし、まばたきを何度もやった。「本当ですか」

④久留米がどういふ顔をしていたのか、僕は見逃していた。もしかすると、見てはいたのかもしれないが、今となっては覚えていない。

「プロの選手になれますか」草壁の顔面は朱に染まっていたが、それは恥ずかしさよりも、気持ちの高まりのためだったはずだ。久留米の立つ方向から、鼻で笑う声が聞こえたのもその時だ。何か、草壁をたしなめる台詞を発したかもしれない

い。

「先生、草壁には野球の素質があるかもしれないよ。もちろん、ないかもしれないし。ただ、決めつけるのはやめてください。」

「安斎はどうして、そんなにムキになっているんだ」久留米が冷静に、淡々といなす。

「でも草壁君、野球ちゃんとやってみたらいいかもよ」佐久間がいつの間にか、僕たちの背後に立っていた。「ほら、プロに太鼓判押されたんだから」

草壁は C を力強く縦に振った。

⑤ 恐る恐る目を向けると、打点王氏は僕の予想に反して、明るい顔をしていた。あれは、C ⑥ 乗りかかった船、の気持ちだったのだろうか。それとも、先生と安斎のやり取りから、嘘をつき通すべきだと判断したのか、そうでなければ、草壁の隠れた才能を実際に見抜いたのか、いやもしかすると、(注4)豪放磊落の大打者はあまり深いことは考えていなかったのかもしれない。彼は、草壁に向かい、「そうだね。努力すれば、きつといい選手になる」と付け足した。

久留米はそこでも落ち着き払っていた。「何だかそんな風に、持ち上げてもらってありがたいです」と打点王氏に頭を下げた。「草壁、おまえ、本気にするんじゃないぞ」とも言った。「あくまでもお世辞だからな」

⑦ 念押しする口調が可笑しかったからか、数人が笑った。場が和んだといえ、和んだが、わざわざそんなことを言わなくとも、と僕は承服できぬ思いを抱いた。

「先生、でも」草壁が言ったのはそこで、だ。「僕は」

「何だ、草壁」

「先生、僕は」草壁はゆっくりと、「僕は、そうは思いません」と言い切った。

安斎の表情がくしゃつとゆがみ、笑顔となるのが目に入るが、すぐに見えなくなった。なぜなら、C ⑧ 僕も目を閉じるほど

顔をゆがめ、笑っていたからだ。

(伊坂幸太郎『逆ソクラテス』による。なお、問題の都合上、本文を一部改めた。)

(注)

- \* 1 打点王氏……プロ野球で打点王となった有名選手。前日に主人公の小学校で講演をしたが、雨のために野球教室が中止になり、翌日が晴れたら野球教室をすると約束してくれた。
- \* 2 タクシーに乗り込んだ二人……主人公と安齋は、講演から帰る打点王氏のタクシーに乗り込み、草壁のためにある依頼をしていた。
- \* 3 念じて……祈って。
- \* 4 豪放磊落……心が広くて明るく、小さなことにこだわらないこと。



問1 空らん  A  C に入る語として適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

A  に覚えがある

B  をみはる

C  を力強く縦に振った

ア 腹    イ 首    ウ 腕    エ 顔    オ 目    カ 手    キ 胸

問2 波線部 a b の語句の意味として最も適当なものをそれぞれ後から選び、記号で答えなさい。

a あたふたしながら

ア 驚きあわてながら    イ 夢中になりながら

ウ 興奮しながら

エ そわそわしながら    オ いやいやながら

b 臆おくせず

ア ためらわないで

イ 遠慮えんりよしないで

ウ 緊張きんじやうしないで

エ いやがらないで

オ おどおどしないで

問3 傍線部①「自分に向けられた槍の切っ先の形を、じつと確認するかのよう」とあるが、その比喩の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 安斎が自分を批判する真意が何かを考えているようす。
- イ 安斎の反抗的な態度を押さえつけようとしているようす。
- ウ 安斎が納得するようにどう言おうかと思案しているようす。
- エ 安斎が自分をないがしろにするのを許せなく思っているようす。
- オ 安斎の言葉を聞いてあつけにとられてぼうぜんとしているようす。

問4 傍線部②「先入観」とは、誰のどのような先入観ですか。二十五字以内で説明しなさい。

問5 傍線部③「弱いながらに風の音がした」とはどういうことを表していますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 風でよろめくような頼りない振り方であったということ。
- イ 小さな音が聞こえるぐらいに静まり返っているということ。
- ウ わずかではあるがスウィングに鋭さが出てきたということ。
- エ 素振りをくり返しているうちに息が荒くなつたということ。
- オ 下手だが一生懸命な姿にさわやかさを感じるということ。

問6 傍線部④「久留米がどういふ顔をしていたのか、僕は見逃していた」とあるが、その理由の説明として最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 草壁のことを久留米はばかにしてきたので、顔も見たくないと思ったから。
- イ 草壁の変化するようすに気を取られて、久留米のことは意識になかったから。
- ウ 周囲の気色が急にまぶしくなって、久留米の顔が目には入らなかつたから。
- エ 打点王氏の指導力に圧倒あつとつされて、久留米のことなどすっかり忘れていたから。
- オ 打点王氏の言葉に対する草壁の疑いを、何とか晴らそうと考えていたから。

問7 傍線部⑤「恐る恐る目を向けると」とありますが、この時の「僕」の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の発言のせいで久留米と安齋が対立したことに、落ち込んでいるのではないかと気をもんでいる心情。
- イ 頼たのみに応じてあげたのにお礼も言わない僕や安齋に対し、あきれているのではないかとおびえている心情。
- ウ 自分の言葉を信じてしまった草壁に対し、申しわけなく思っているのではないかと心配している心情。
- エ 思ってもいないことを無理やり言わされて、不機嫌ふいきげんになっているのではないかと不安に思っている心情。
- オ 自分がほめた子供のことを鼻で笑った久留米に対し、腹を立てているのではないかと恐れている心情。

問8 傍線部⑥「乗りかかった船、の気持ち」とはどのような気持ちか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 打点王氏の、僕と安斎との筋書きに関わった以上はやりきらなければならないという気持ち。

イ 打点王氏の、僕と安斎とのくわだてに関わった以上は関心を持ち続けなければならないという気持ち。

ウ 打点王氏の、僕と安斎との策略に関わった以上は犠牲ぎせいをはらってでもやろうという気持ち。

エ 打点王氏の、僕と安斎との作戦に関わった以上はこっそり手を回しておこうという気持ち。

オ 打点王氏の、僕と安斎とのたくらみに関わった以上は成功するように裏をかいてやろうという気持ち。

問9 傍線部⑦「承服できぬ思い」とは僕のどのような思いか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 打点王氏のおだてに乗った草壁に対して腹を立てている久留米の言い方は、理解できないという思い。

イ 草壁の機嫌きげんをとろうとする打点王氏の思いを無視した久留米の言い方は、認めることができないという思い。

ウ せっかくの打点王氏の言葉をだいなしにする久留米の言い方に、納得して従うことはできないという思い。

エ 草壁が打点王氏のお世辞を真にうけているのをとがめる久留米の言い方に、あつけにとられるという思い。

オ 草壁を手ばなしでほめる打点王氏に調子を合わせようとする久留米の言い方は、やりすぎだという思い。

問10 傍線部⑧「僕も目を閉じるほど顔をゆがめ、笑っていたからだ」とありますが、「僕」はなぜ笑ったのですか。その理由を六十字以内で説明しなさい。

三 次の傍線部のカタカナを漢字に書き改めなさい。

- ① せんたく物をホす。
- ② 満月が湖にウツっている。
- ③ 大時計はゆっくりと時をキザんできた。
- ④ シショウがあつて参加できない。
- ⑤ 古くからのカンシユウが残る村。
- ⑥ 一点差をシシユして勝利した。
- ⑦ ダンネツの効果がある建築材。
- ⑧ カメラがナイゾウされた製品。
- ⑨ 大会の優勝をシャテイに入れた練習。
- ⑩ カゲキな発言はつつしむべきだ。



2021B1

↓ここにシールを貼ってください↓

# 国語 解答用紙

受験 番号							
名前							

問 4	問 2	問 1	二	問 8	問 7	問 6	問 2	問 1	一
	a	A				最後	最初		
								もの。	
	b	B		問 9				問 3	
		C						問 4	
	問 3							問 5	

								三		問 10	問 8	問 5
⑩	⑦	④	①									
	⑧	⑤	②							問 9	問 6	
	⑨	⑥	③									問 7

B日程 国語

16 ページ 5行目

問6 ウ 〈誤〉

周囲の気色が・・・

〈正〉

周囲の景色が・・・